

S branch

2 年次デザイン研修
小菅俊太郎 齋藤洋平

均質なオフィスを超えて、一歩先のフレキシビリティへ

01. 現在のオフィスのコンセプト

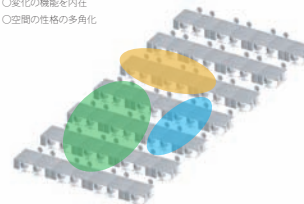
- 用途の均質
- 経済的なスパン構造
- 必要最低限の天井高



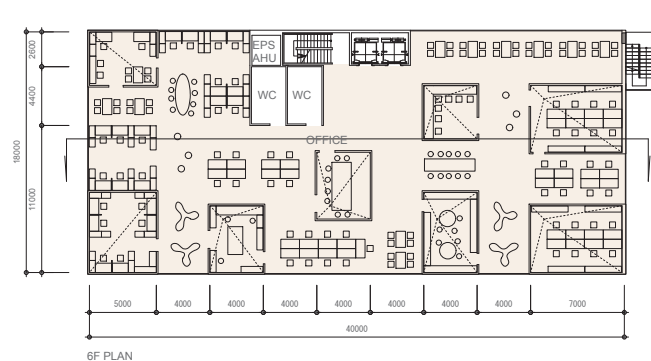
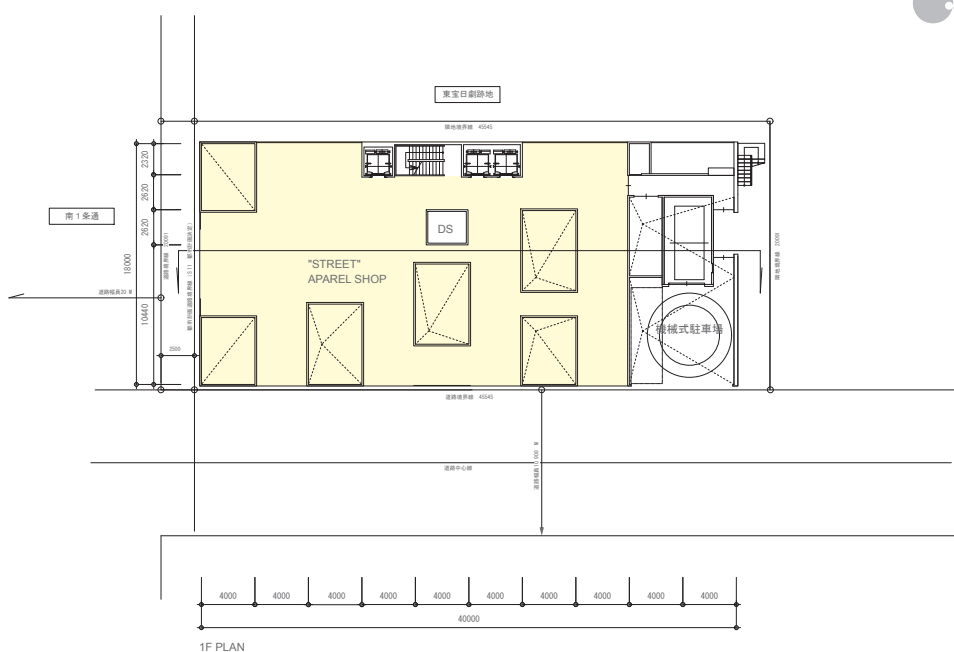
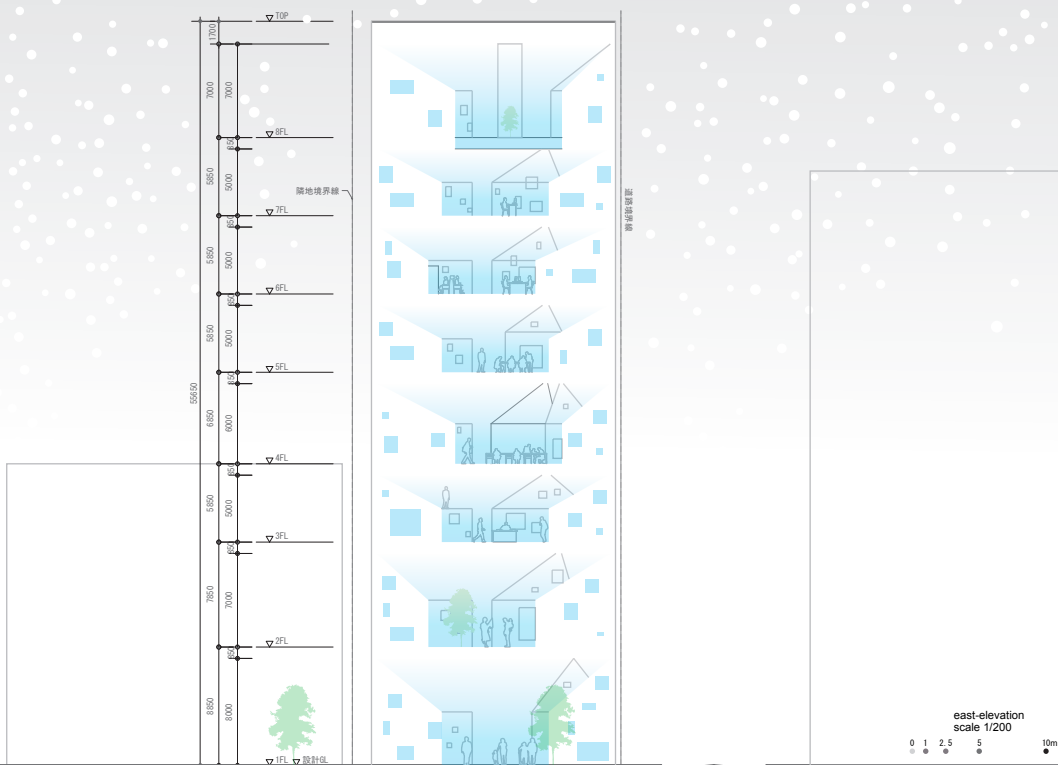
何も無い空間をパーティションで区切る整然と机が並び、変化に対応しやすい空間

02. 新しいオフィスのコンセプト

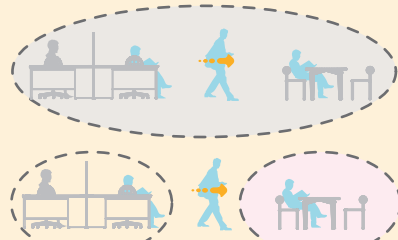
- 多用途的な構造
- 変化の機能を内在
- 空間の性格の多角化



創造的なワークプレイス新しいワークスタイルへの追求

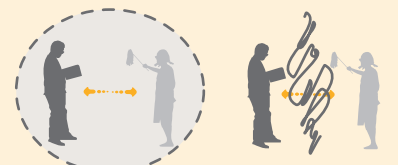


Move (移動)



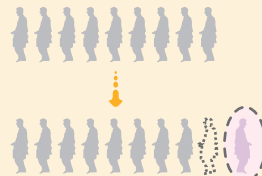
「移動する→場所が変わる→気分や思考が変わる」といった、移動による変化という体験を繰り返すことで、リフレッシュや創造性を高める。

Distance (距離)



「調整できる距離間」を繰り返すことで、集中とコミュニケーションが繊細につくられていく。

Public/Personal (パブリック/パーソナル)



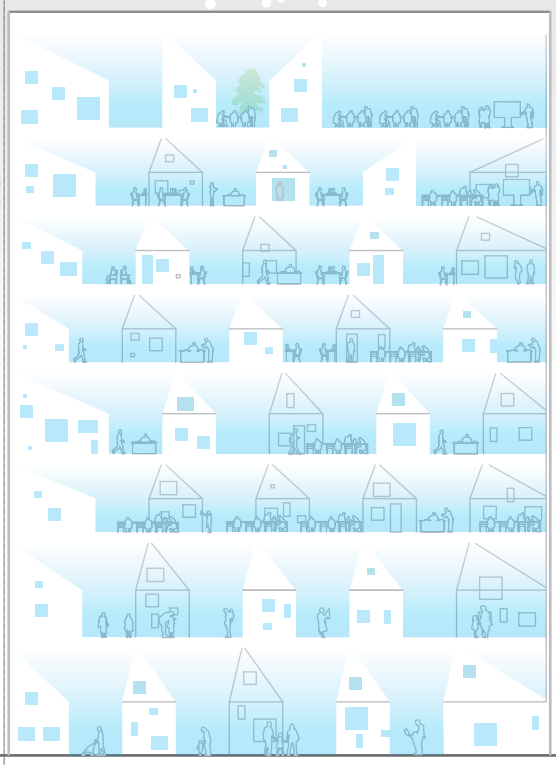
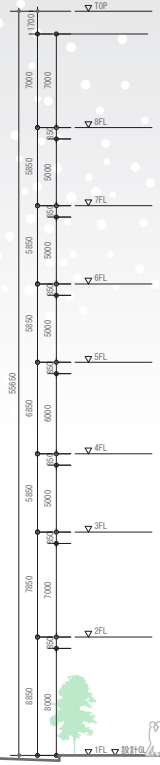
集団でいるときと一人での思考には差異がある。ゆたかな風景を持った、「一人での場所」を繰り返すことで繊細で独創的なアイデアを誘発する。

Dvice=House

03.3 つの関係性を繰り返すストラクチャー



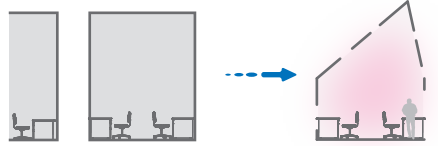
ユニバーサルな空間に重なり、切り分け、再編成する。



居住階層

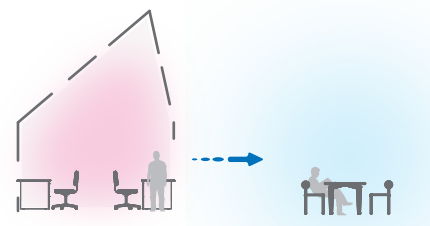
north-elevation
scale 1/200
0 1 2.5 5 10m

04. 「パーティション」から「House」へ



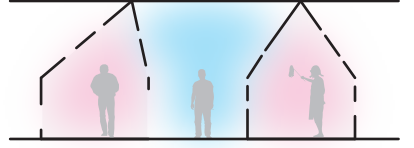
パーティションによる分割は空間を2つに分け、同じ量の空間をつくり、外部と内部の関係を遮断する。Houseによる分割は空間を3つに分け、質の異なる空間をつくり、関係性を調整する。

05. 区切りとしての House



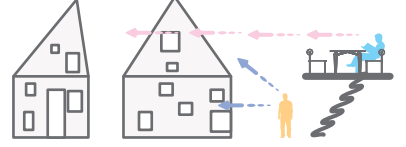
空間単位としての強いまとまりをもち、空間を「出る」、「入る」という体験を補強する。

06. レイヤーとしての House



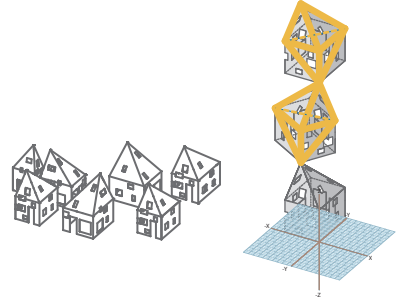
「開けたい場所」と「囲われた場所」という空間の変化を「恋結しの距離」という互いの距離感を調整し、やわらかな関係性を築く。

07. ランドスケープとしての House



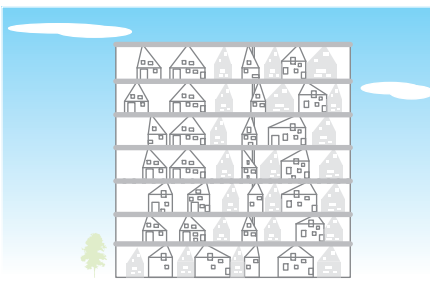
「地上」と「屋根の上」という2つの風景をつくる。「地上」のワークスペースと距離のある、開けた風景を持つ「ソニタリスベース」ができる。

08. 構造としての House

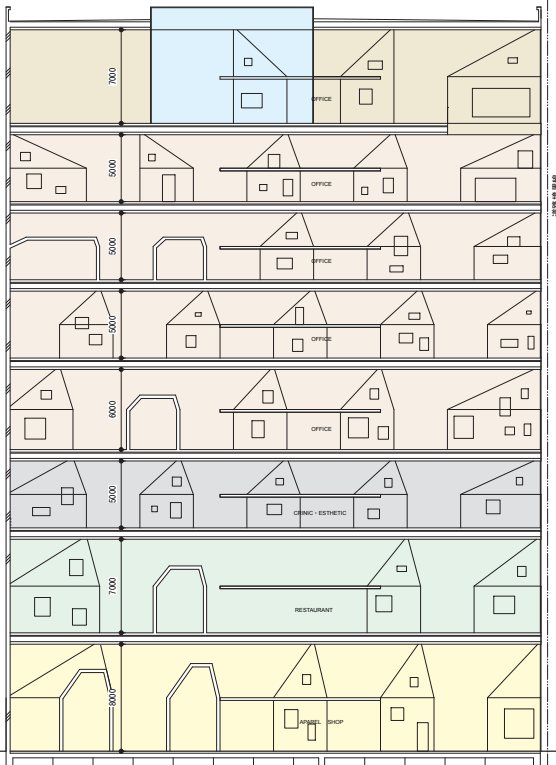
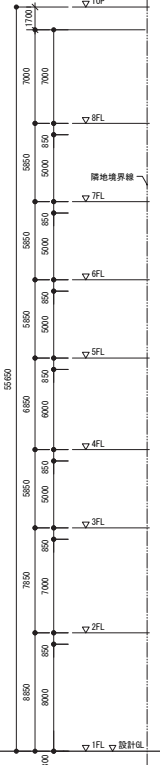


形体のメインモチーフとしてのHouseを構造体として利用する。ファサード、内部空間でのHouseが主要な構造要素として見えるようになる。Houseの中にCFTとケープルの構造ユニットを仕込み、上から荷重を下へと流す。

09. 構成



それらが積層し、各フロアを構成し、それぞれのフロアに様々な表情をつくりだす。

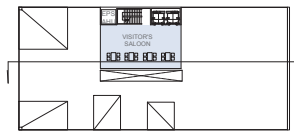


道路階層

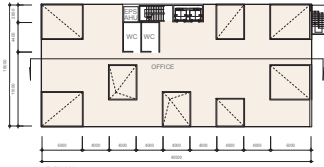
section
scale 1/200
0 1 2.5 5 10m



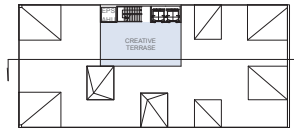
8F PLAN



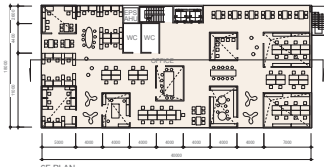
8F MEZZANINE



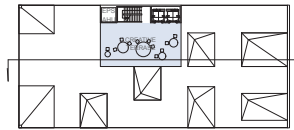
7F PLAN



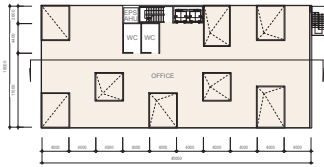
7F MEZZANINE



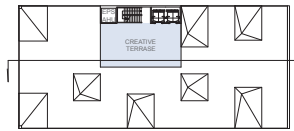
6F PLAN



6F MEZZANINE



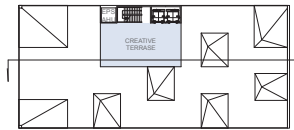
5F PLAN



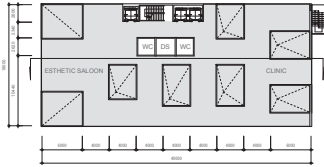
5F MEZZANINE



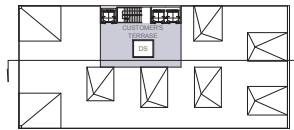
4F PLAN



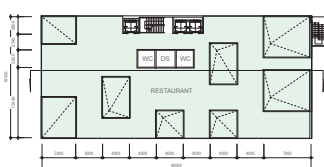
4F MEZZANINE



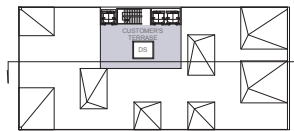
3F PLAN



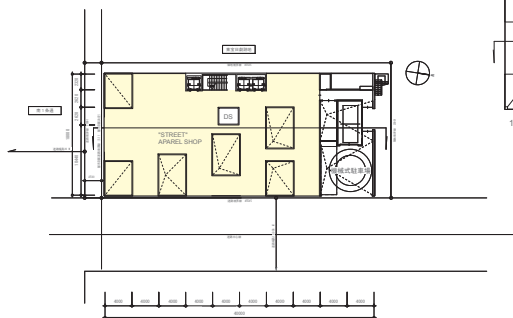
3F MEZZANINE



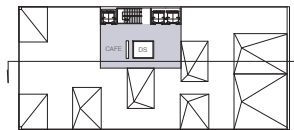
2F PLAN



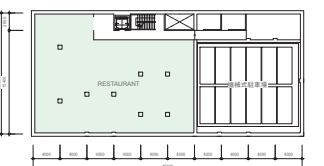
2F MEZZANINE



1F PLAN 1:400



1F MEZZANINE



B1F PLAN



House 内部と外部にはいままでのオフィス環境にない、あたらしいコミュニケーションがのかがちが生まれる。



フロア内にアクティビティを誘発し、オフィスビル内の「就労」に、空間的な楽しさとにぎわいをもたらす。

このオフィスビルがまちのアイコンとして
札幌のまちのにぎわいの機軸として機能する。

